

り抑制されたことから、PGE₂ は当該遺伝子群の発現を抑制するといったネガティブフィードバック作用を有することが考えられる。

選択的 COX-2 阻害剤は、PGE₂ 産生を抑制することにより急性炎症を抑制することは周知の事実であるが、同時に細胞外マトリックスの破壊および慢性疼痛に対してはむしろ増悪させてしまう可能性が危惧される。

P3-41.

ビスフォスフォネート系薬剤関連顎骨壊死症例の CT 値による検討

(社会人大学院三年・口腔外科学)

○浜田 勇人

(口腔外科学)

松尾 朗、森光 麗子、里見 貴史

金子 忠良、近津 大地

【緒言】 ビスフォスフォネート (BP) 系薬剤投与に起因する顎骨壊死 (BRONJ) の報告は Marx 以来欧米では 2,500 例を超えている。本病変の多くは癌の骨転移などに対する注射剤で発症するが内服薬での報告も認められる。わが国でも BRONJ が急増しているが難治性である。特に本疾患の発症リスクを減少するためには早期発見が必須であるものの、画像診断法はまだ確立されていない。

今回われわれは BP 系薬剤投与に起因する BRONJ 症例に対し CT 撮影を行い、CT 値から BRONJ の発症を予測できるか検討した。

【対象】 東京医科大学病院歯科口腔外科を受診した BP 系薬剤投与患者で、アメリカ口腔顎顔面外科学会 (AAOMS) の定義にて BRONJ と診断された 20 例。BP 系薬剤非投与で顎骨内に病変を認めない患者 20 例を対象とした。

【方法】 下顎骨を歯槽部および骨体部でそれぞれ左右の前歯部、臼歯部に分割し計 6 か所の CT 値を SimPlant Pro (Materialize Dental 社) を用いて計測した。

【結果】 BRONJ 群の平均年齢 62.50 歳で、コントロール群では 54.92 歳であった。両群とも男性 3 名、女性 17 名であった。BRONJ 群の原疾患は乳癌、前立腺癌、骨粗鬆症、関節リウマチなどであった。主な投与薬剤は、アレディア、ゾメタ、ベネット、ボ

ナロン、フォサマックであった。CT 値はコントロール群に比べ BRONJ 群が有意に高かった。

【考察】 今回われわれは BRONJ 症例に対し、CT 値を計測し有意な差が認められた。CT 値から難治性の BRONJ 発症リスクを評価できると思われた。

P3-42.

八王子医療センター訪問看護室の活動状況

(八王子・神経内科)

○田口 丈士

【はじめに】 八王子医療センターは東京都南多摩地域南西部に位置し、周辺人口は 80 万人、621 床・25 科からなる総合病院である。大学病院分院として高度な医療を提供し、かつ地域の基幹病院としての役割があり、教育研修病院として研修医の指導の充実をはかっている。1996 年に発足した八王子医療センター訪問看護室の活動状況を報告する。

【活動内容】 自宅退院後、地域の訪問看護ステーションへ引き継ぐまでの 3 ヶ月間の病状観察・生活指導・看護技術・社会資源の提供をおこなう。周辺の看護学校からの研修生の受入れと教育もおこなっている。訪問看護運営委員会を年 1-2 回おこなっている。

【スタッフ】 室長は 2006 年度まで植木彬夫教授 (内内)、2007 年度から筆者が、そして 2010 年 10 月より富安朋宏助教 (腎内) へ引継いでいる。訪問看護師は 3 人体制で、現在は宮林 (師長)、谷川 (指導係)、関谷看護師である。訪問エリアは片道 20 分までを目安として、2008 年度は八王子 3 km 圏内 14 件、同 3-5 km 圏内 26 件、同 5 km 圏外 23 件、市外 5 km 圏内 (町田・相模原) 4 件、市外 5 km 圏外 (上野原・日野・多摩) 6 件であった。

【訪問介護状況】 過去 5 年間の実績：月別訪問看護件数は月 25-35 人 (延べ 100-130 件前後)、月訪問延べ件数の合計は 1,300~1,600 件/年。患者年齢は 70 歳代 > 60 歳代 > 80 歳代の順で、男性がやや多かった。診療科別では呼内 > 消外 > 腎内が多く (2008 年度)、呼内・老年・循内は減少、腎内・耳鼻は増加、脳外・神内・胸外の訪問件数は上位で安定していた。処置件数では、創処置 > 在宅酸素 > 腹膜透析 > 疼痛管理 > 胃瘻の順で多かった (2008 年度)。在宅酸素は激減、腹膜透析は増加、疼痛管理・吸引器・在